



情報文化社会
教授 御厨 貴

Information, Culture and Social Studies
Professor MIKURIYA, Takashi

人材養成によって、さらに意義が拡大していく 「安全・安心学」と「オーラル・ヒストリー」

インタビュアー：特任助手 清水 唯一朗／手塚 洋輔

——最初に、こちらの研究室ができた時のお話からお伺いできますか。

私がここに併任になったのは2002年12月で、その後、振興調整費の審査が通って、2003年10月に正式にこの研究室を開きました。研究の大きな柱としては、1つは、新しく始めることになった安全・安心と科学技術の人材養成のプロジェクト、もう1つは、ここ10年来、私が引き継いできたオーラル・ヒストリーのプロジェクト、この2つです。

——まず、科学技術振興調整費プロジェクトの「安全・安心と科学技術人材養成プロジェクト」¹について、目的などをお話いただけますか。

現在、科学技術に対する客観的な規範として安全性というのは一般的に高まっているんだけど、一方、大衆消費社会として考えると、科学技術を使った製品や食品などに対し、消費者の安心感があまりないわけです。そこで、安全工学的な話と、人間の心理学的なメカニズムの話をもつテーマにして考えていこうと。僕は文系出身で専攻は政治学なので手に余るテーマとも言えるんですが、そのための人材の養成となれば、これは我々も手伝いできるし、むしろ理工系の人とうまく連携して広がりを持たせれば、何か成果が生まれるんじゃないかと思ったわけです。

「文理融合」というより「文理協働」 あるいは「文理配慮」

——先端研の中でも文理融合の様々な試みが進んでいます。実際は協力して働く「文理協働」と言う方が近いんじゃないかとも思いますが、現在のプロジェクトを理系の先生方と一緒に進められてみて、そのあたりはどうでしょう。

「文理協働」というのは確かに正しい。1年やってみて感じるのは、むしろ

「文理配慮」ですね。文が理に配慮して、理が文に配慮する、それ以上はなかなか難しいんじゃないでしょうか。私も50を越えて、もう30何年文科系でやっていると、理科系の人と話しても、文科系と一緒に何かやるように、サッとお互いに理解できるというふうにはならないんですよ。だから僕らの方が理科系の方に近づいて理解しようと思っても、それは誤解になるかもしれない。でもミスマンダースタンディングでいいと思うんです。それである種の理解領域ができながら、そこに何かが生まれる。思わぬ波及効果が出てくる。

しかし、最後のところはやっぱり、一緒にやるのは難しく、それでもお互いの領域でできることを見つめようということになる。僕はそれでいいと思うんですよ。最初から文理融合と言うとね、水と油を混ぜても、すぐまた元に分かれるというような結果になりがちかなと思うんです。

ただ、先端研において面白いのは「文理」だけじゃないんですよ。理工系の先生の、工学部とか理学部、学科単位でいったら恐らく学科や専攻の中で埋もれている話が、先端研で「文理融合」あるいは「理工融合」を起こす。実は今までよく知らなかった他の領域に対し、融合というか、それぞれ配慮して関心をもつようになり、さらには文科系の我々とも同じような作用が起きる。先端研は、そういうことができやすい環境だからですね。発想を豊かにする要素がたくさん詰まっていて、そこへどうやって僕は挑戦していくかということ。そういう意味ではすごく刺激的だと思いますし、なかなか得難い経験ですね。

——確かに、先端研の先生方は、他の領域と接触をしたいとか、いろんな知識を吸収したいという意欲の高い方がたくさんいらっしゃって、その意欲が様々な連携を生み出していますよね。

先端研にとっては、まさにそこがエネルギー源で、そのような種をどれだけつけないでいくか、でしょうね。とにかく、先端研では、ぼつんと研究するのは勿体ない。やっぱり、どどんつながらって、領域が広がっていくというイメージが大事ですね。

スクールから様々な波及効果が生まれた 「安全・安心と科学技術人材養成プロジェクト」

——人材養成のコースの仕組みについて伺っていききたいと思います。こちらは共通コース、アドバンスコース、ジャーナリストコースの3つがありますが、これらのコースの特色と相互の連関は、どのようになっているのでしょうか。

共通コースというのは、いわゆるオープンスクールですね。いろんな先生方に来てもらって話をして頂いてますから、まず知識の面では非常に豊かになりますね。参加者は社会人といっても、それぞれの分野で安心・安全を考えなければいけない専門家が多いですから、相互の情報共有をおこなって、終わってからもOB会の活動が非常に盛んです。月1回、OBスクールをやっていますが、これは我々の手助けを全く借りずに自主運営しています。これも大きな成果の一つだと思うんですよ。

教える側からすれば、普通は、他にどんな先生がどんな講義をしているかはわからないということが多いんだけど、我々はそこを少しでもつなげようと従事者委員会を作ったり、委員会に出られない先生については説明に行き、「全体の中であなたはこういう位置づけです」ということを明確にしながら進めました。そのためか、この講義全体にアイデンティティをもってくれた先生は結構多くて、修了式やパーティやったりする時にも皆さん積極的に参加してくださって。これも成果として大きいと思いますね。

スクールをどこでやるかと言った時に、駒場でなく、敢えてアークヒルズにしたのは、以前、知財のスクールをあそこでやったということもありますが、参加者に社会人が多く、平日の夕方6時ないし6時半に行くのは非常に大変なので、場所のいいアークヒルズなら来やすいだろうということ。心理的に楽というのは結構重要なんです。そういうモチベーションを与えることも大事です。

共通コースはもう2年やりましたが、それなりに成果は出てくるんじゃないでしょうか。むしろ今度は彼らが発信源になっていく可能性はありますね。修了生の中には官庁の人たちや民間の人もいて、それからさらにジャーナリストも含めると、1つの共同体ができるのではと考えています。後は我々がそれをどのように支援していくか、ですね。

アドバンスのコースは、講義だけでなく、実践的に安全・安心を勉強しようという人たちに対して、いろんな面のリスクにどう対応すべきかについて、シミュレーションやゲーム、ロールプレイを使ってやるのを考えていて、これは実験的にもすごく面白いと思っています。10人ぐらいのコースで始めますけれども、これもまた一つの成果になるんじゃないでしょうか。

ジャーナリストの養成というのが、もう一つのミッションとしてあります。これは先端研の特任教授でもあり、ジャーナリストとしても著名な武田徹さんに来ていただいて、ほぼ全体のコース設計もお任せしています。基本のラインは、科学技術、それから安全・安心なんだけれども、ジャーナリストの養成ということいえば、通常のジャーナリストの養成と、いわゆる科学技術ジャーナリストの養成の仕方で、そんなに大きな差はないだろうと。従って通常のジャーナリストと同様に育てながら、最後はそれぞれの面に強いジャーナリストをつくっていくという、個性を重視した形でやっています。まだ始めたばかりですから1年間でどれだけのものができるかわからないけれども、半年過ぎたところという、長期の取材に耐える人材が出てきているし、大手の新聞社にインターンで行って現場を見たりもしていますからね。彼らがそのように実践的に育っていくと。彼らの方が、共通コースよりは年齢層が若いんですね。学生もいるし。養成というか育成ですかね。今、まさに育っている人たちが今年出て、さらに来年も出て、そうやって層をなしていった時に、何か変わってくるものがあるんじゃないかと期待しているんですよ。

——振興調整費プロジェクトとしてはあと3年あるわけですが、今後どのように展開していくのでしょうか。

安全・安心のプロジェクトをやっているのは、実は人材の養成は非常に面倒なんじゃないかと思ってたんですが、人材の養成を考えることで、こっちも育成されるというか、こっちもすごく勉強になった。こういう機会がなければ、歴史のことをもう一遍考え直そうなんて、恐らく思わなかったんじゃないか。そういう幅を広げたって意味では、我々にとって非常に有意義なプロジェクトであったというのが今の率直な感想ですね。

こここのところ東京大学出版会と、ずっとやりとりしていたんですが、ようやく「安全・安心学」という名前で、我々の共通コースの内容を基本にして、村上陽一郎先生と、堀井秀之先生、それから私が一応編集代表で、我々3人が編集という形で、2005年5月に本が出る予定です。

オーラル・ヒストリーは歴史回顧の意味を越え、 未来への指針を示す

——次にオーラル・ヒストリーの話に移っていきますが、先生はオーラル・ヒストリーに取り組みされて10年ぐらいになりますが、オーラル・ヒストリーとはそもそも何かということからお話いただけますか。

今、僕がやっているオーラル・ヒストリーの意味について定義しますとね、まず、いわゆる公職の体験者が自分の体験を中心に、自分の一生全て、あるいはそのある部分について述べる行為があります。ただし、それを述べるにあたっては、本人が自由勝手に述べるのではなく、オーラル・ヒストリーに関するプロフェッショナルが質問を用意し、その質問と応答という形で記録を作り上げていく。出来上がった記録は、できるだけ速やかに研究者ないし世間一般に公開されて、その記録が利用されるころまでを含めて、オーラル・ヒストリーという言葉でまとめているんですね。オーラル・ヒストリーの効果は、歴史を回顧するという意味を越えて、将来の政策選択の基礎基盤に使われるという話へ移行しているように思いますね。

——政策選択の際に消えてしまった可能性は資料には残らないから、それを掘り起こすのがオーラルの意義の一つだとも言われてましたよね。

インタビューで面白いのは、やはり最初からある政策が必然的に出てくるという状況は、どのような場合にもないんですよ。ある方向性が決まっていて、その方向性を決定付けるために、ある法案が出たような話になりますが、実はそうではない。たとえそういう状況であったとしても、しがらみは深いというか、Aという省がある政策を掲げれば、Bという省はそれについて何も考えていなくてもとにかく出すと。しかし、残っている資料には、ずっと昔から考えて出したようになっていくものなんです。

研究者って必然論で書きたがるんですよ。歴史の流れを背景に感じながら書いている方が安心なんですよ。だから逆に、歴史の流れと違う可能性があるなんて書くこと自体が苦しくなったりしてね。だけど、必然論の中で、偶然論のかたまりが歴史を作ってるってことは、オーラルをやっていると、はっきりしてきた感じがしますね。

——理系の方や企業の方とお話すると、現状では失敗の経験が生かされず、失敗は失敗で終わっているけれども、その政策というか、会社の方針の決定にも応用が利くんじやないかなんてお話しも出てきますね。

組織として失敗例とか、その時に採択されなかったオルタナティブっていうのは、消すというか忘れることが、組織本体には必要なんだと思うんですよ。逆にいつまでも気にしてたら、今やってる政策決定もね、オーソドキシキーだって怪しくなるんですよ。忘れること、捨てること、そこから唯一取られた一本の政策に対して、これしかないと思わずに進むことにな

るんです。だから異論を言った人もこれに全部賛成だったということにして、前に向かって走っていく。それは高度成長期から今日までの日本で、右肩上がりの時には正解だったんじゃないですか。だめだった政策について、いじいじ考えるなんてのは、とんでもない話で、組織を運営し組織を生かしていくのは、まさにそれが一番だったと。でも、右肩上がりばかりじゃないかと気づいてくると、昔はもうちょっと別な考えがあったんじゃないかと、ようやく思い始めるのですよ。だからオーラル・ヒストリーって、若くて元気な時期とかそういうタイプの人にはやらない。活動期の真っ盛りだね、絶対考えないから、人は。

——今、オーラル・ヒストリーのプロジェクトは、内閣法制局の研究、内閣官房の研究などが軸としてありますが、この辺りの目的などをお聞かせください。

僕は、都立大と政策研究大学院、そして先端研で、ずっとオーラル・ヒストリーの研究を進展させてきたわけですけども、最初はとにかく質より量といった感じでやってきました。それはその当時としては決して間違っただけじゃなかった。それによって随分、オーラル・ヒストリーが広く認知されるようになりましてからね。ただ、オーラル・ヒストリーを方法としてリファインするためには、何のためにこれを使うかということを考えなくちゃいけない。当然、かなり大きなテーマ設定をしなきゃいけない。

国鉄の民営化とJRの展開というのは、これからの日本の公共政策にとって、非常に大きなインパクトがあるトピックだった。それから法制局は、今唯一の政府の公定の、法律や政策の解釈の機関であると同時に、そこを通さないと政府立法というのはいけませんという機関であって、そこで何かおこなわれているのかをきちんと押さえておく必要がある。もう一つ、内閣官房。これは僕がかつて副長官を務めた石原信雄さんをやったことがあって、そして今まさに古川さんという次の副長官の方を始めたばかりですけども、それを通じて内閣官房こそね、文書が残っていないところですから。文書がないとなれば、やはり語ってもらわないと困るわけで、従来はそこをそんなに重視しなくてもという考えがあったんだけど、今は特に中曽根以後とっていいけど、中曽根以後はやっぱり官房、そして今日は内閣府まで含めてだけど、内閣ってものの存在と、その重みというのは考えられなくらい大きくなっていきますからね。90年代というのは、党の決定だけ見れば大体わかった70年代、それから80年代前半ぐらいと決定的に、政策決定の研究のやり方が違ってきている。

「夏の学校」参加者の意欲がもたらした オーラル・ヒストリーの新たな展開

——オーラル・ヒストリー研究を定着させていくとなると、やはり人材養成が必要になりますよね。

オーラルもね、昔は奥義として伝える面があって、先生のオーラルに同行して、後ろに座って実際の応答から様々なテクニックを吸収するという時代があってね。でもそういうやり方だと、なかなか人は育たない、時間もかかるし。そこで、僕はある程度マニュアル化できるんじゃないかと思うようになりました。それで2004年夏に、武田徹さんや永江朗さんとかいるんな人の助けを借りて「オーラル・ヒストリー夏の学校」を開いたんです。これは大学院クラスを想定して、夏休み7月末と、それから実習期間をおいて8月末、9月初めまでのおもに金曜、土曜の夜にやりました。募集をかけたなら全国から30人近く応募があって、書類選考で15-6人に絞って、もちろん本学の大学院の人もしました。

とにかく自分でオーラルをやって論文に使いたいとか、インタビューやりたいと思っていたがなかなか機会がなかったとか、意欲の高い人たち、あるいは既に始めている人たちが集まってくれたので、非常に良かったです。実習の方もかなりやって、実際に速記をおこさせたり、テーマ別にお互いにインタビューして、それを記録してみたり、いろんな形を使って。

宿題も出してね。夏休みにお盆の期間をはさんで実際に実習で、自分でインタビューしてくるというのをやったんですよ。いろいろ面白いのがあってね、例えばプロ野球の監督だった西本幸雄さんにインタビューに行った人がいますね。最初は大丈夫かと思ったんですが、それが見事なインタビュー集を作ったんですよ。一種の野球文化史になってるんですね。こんなのができるとは、僕は想像もしなかった。もちろん年季の問題が全然ないとは言えないけど、人と会って話をするのが心底嫌だって人以外は、まあある程度はできてしまう。だから、僕は素人さんがそんな形で意欲を持って、どんどん変わっていくプロセスが生まれてくるんじゃないかという気がしています。

——オーラルの記録の部分に関して、何か課題があるのでしょうか。

今、どんどんオーラルの記録ができてるんですけど、質の管理といいますか、実は喋ったことは全て本当とは言い切れません。喋ったことに関して吟味をしないとイケない。普通、文書資料に関しては資料批判の学問というのがあるのに、オーラルに関しては意外に甘かったりする。だから喋ったものを一生懸命活字にして、それがもう真実であるかのように使われてしまうんです。しかし、喋ったものがどれだけ真実かどうかは別の面からチェックしなくちゃいけない。オーラル・ヒストリーをそれ自体クリティークしていくようなことをやらなければと思っていて。そのための研究フォーラムを間もなく発足させて、そこで発表してくれた人が、今度はそれをきちんと文字に書いて、どこかの印刷媒体に残せるような仕組みを作ろうと思ってましてね。そこをクリアしてこそ信頼に足る資料になると思うんです。

効率的に記憶を再生させるには…… 「記憶」の横断的研究プロジェクト

——オーラル・ヒストリーの関連で言えば、先端研でやっている記憶の研究会を新しく立ち上げたわけなんですけれども。

堀先生と橋本毅彦先生、伊福部先生、そして廣瀬先生と、2004年初めから月に一度くらい集まっています。長年僕が気になっていたのは、人にあることを喋ってもらう時に、どうやったら一番効率的に、しかも無駄なく本人の満足のいくように、記憶を蘇らせられるのかということ。そんな話をしたら廣瀬先生が「それは自分たちも考えている」と。今度は、出てきた記憶が仮にあるとすると、どの時点で補足して活字化していくのか、これは伊福部先生や堀先生の課題でもあるんだけど。我々はテープレコーダーに記録させて、後日テープ起こしのプロフェッショナルが時間をかけて起こしてきたものを見るわけですね。ところが今はバリアフリーでできるようになっていて、喋るそばから活字化することができる。しかも90%以上間違いないとなると、2時間オーラル終わった時に既に活字化された状態になる。そのように喋ったものが横ですぐ活字化されていく状況の中で記憶の再生をしている本人というのは、そうでない時とどう違うのか。即時に活字化した方が人間の記憶を引き出すのにいいんだろうか。それとも、まだ直せるゆとりがある中で思い出している方が本当の記憶が出てくるんだろうか。だから記憶の問題って、認知科学の問題に限りなく近づいていくんだけど、そういう問題も含めて少し議論をしたらどうかと。

廣瀬先生のところでやっているウェアラブルコンピュータは、要するに何かをしながら全部記録してしまおうというもの。だから「先生、オーラルやる時にウェアラブルコンピュータを着てくれないか」とも言われているんですよ。堀先生の研究室の赤石先生のシステムで面白いのは、こっちが出すある種のキーワードがいくつかあると、その言葉をコンピュータでつないでいて、どういう言葉のツリーが出来るかが視覚化されるんですよ。どうも、廣瀬先生や赤石先生は、もっとコンテンツを求めていて、一方、こちらはコンテンツはかなりのものを持っているんだが、なかなか有効に形を変えることができない。そこで共同作業をすることによって、少

し記憶について面白い研究ができるんじゃないかと今、お互いに模索しているところで、まさに先ほど言った文理融合ということになる。先端研の中でこれだけの先生が関わっているなら、先端研がアシストしてくれる研究として少し時間をかけて立ち上げたいと思っているんですがね。

*1 安全・安心と科学技術人材養成プロジェクト：
<http://www.anzenansin.org/>

政策の記憶の再生って結構難しくって。さっきも言ったように、組織としては忘れてる。で、どうやって掘り出させるかというのがあるわけね。今までは仕方ないから、彼らの履歴書から、「その時代こんなことがありましたよね」とか振ると、「そうだね、万博の年だ」とか言ってる。今はコンピュータグラフィックスで、その当時の情景や役所とか、うまくシミュレーションできれば、すーっと気持ちが入っていきけるかもしれない。「そうだ、あの時の俺は」って、20代当時の記憶を思い出した時に、「あ、俺が考えた最初のプランニングはこっちだったよ」と出てくればしめたもので。

——アーカイブス研究もやっていらっしゃいますね。

アーカイブスって、これも定義をきちんとしているわけじゃないですが、オーラルも含め、文字資料やコンテンツをどうやってきちんと体系的に、しかも利用しやすく残していくかは、多分これからの大きな課題だと思うんですね。さっきの記憶の研究とつなげると、記憶と記録なんですよ。記憶をどうやって記録にして、我々はその記録をどうやったら、いかに手早く、効率的に活用できるようになるのか。先日、資生堂が「ハウス オブ シセイドウ」といって資生堂のある部分を全部、銀座という街もそうだけれど、資生堂が開発してきた匂い、香水なんかも全部アーカイブしたんです。我々も見に行ってそれでいろいろ議論しようと思っているんですが、今後もいろいろ変わった試みに実際に足を運んで、そこでどういうものを、どのように記録しているのか見ていこうと思っています。

若い知性と共に、モノを考え、教養の行方を探る 教育プログラム

——実は先生が、一番力を入れられているのは教育プログラムなんではないかとも思うんですが。

先端研は駒場キャンパスが近いですから、我々は「自由研究ゼミナール」というのを教養学部1・2年の学生に対して開いているんですね。僕がここに来た2003年10月からそれをやってまして。僕は専門が政治学ですから、政治学の本を1週間に1冊読ませて、ディスカッションペーパーを毎回提出させて、それを見ながら全員でディスカッションするゼミをやっているんですね。1週間に本を1冊読むのは最初は苦しいんですけど、段々飛ばし読みもできるようになる。手を抜くと歴然とペーパーに表れるし、しかもそのペーパーは全員に配布しますからね。だから絶対出たくない人に対してはオブザーバー資格を認めて、「提出しない人は来てもいいが、ただし発言権はない」と。だから大体出しますけどね。面白いもので、みんな徐々に成長していきますね。最初からある程度できる人はそれほど伸びないんですけど、むしろよくこれで東大入ってきたなというのが1年経つとすごく変わる。本を読んで要約して何か意見が言えるというのは学んでいく上で最低限必要なことだから、1・2年のうちにとことんやると。その連中がまたね、我々のいろんなプロジェクトに興味を持ってきて、スクールをやる時にアルバイト募集すると結構手伝ってくれたりして。そういうつながりの中で、もちろん僕は政治学ですから、来る学生は理科系ではなくて文I、文II、文IIIの学生だけれど、彼らにとって、先端研って何だろうと知ることのできる、唯一のチャンスなんですよ。文科系の学生に少しでも興味を持ってもらうことも、先端研にとって重要じゃないかと思っています。

(2004年10月20日)

著書

1980年

『明治国家形成と地方経営 1881～1890年』（東京大学出版会）
（東京市政調査会藤田賞受賞）

1996年

『政策の総合と権力 日本政治の戦前と戦後』（東京大学出版会）
（サントリー学芸賞受賞）

1997年

『馬場恒吾の面目 危機の時代のリベラリスト』（中央公論新社）
（吉野作造賞受賞）

2002年

『オーラル・ヒストリー』（中公新書）

2004年

『「保守」の終わり』（毎日新聞社）

略歴

1975年

東京大学法学部卒業
東京大学法学部助手

1978年

東京都立大学法学部助教授

1988年

東京都立大学法学部教授

1989年

ハーバード大学イェンチン研究所客員研究員（～91年）

1997年

政策研究大学院大学客員教授

1999年

政策研究大学院大学教授（～03年）
東京都立大学名誉教授

2002年

東京大学先端科学技術研究センター教授

2003年

東京大学先端経済工学研究センター教授

関連情報

御厨研

<http://www.mikuriya.rcast.u-tokyo.ac.jp/>

東大先端研

<http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/>